かも市史だより

平成26年3月
No.29

◆編集発行　加茂市幸町二丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

小乙・諏訪神社の装飾彫刻

▲ **諏訪神社の本殿**　向拝柱に架け渡された虹梁は絵様で埋まり、両端の木鼻（象鼻）及び虹梁の上方に取り付く蟇股ともども独自の意匠をみせている

▲ **長谷・五社宮の本殿（上）と拝殿（下）の水引虹梁**

▲ **諏訪神社拝殿の向拝**

江戸期以降に建てられた社寺建築は部材の各所に装飾彫刻を用いています。特に、虹梁・木鼻（象鼻）・肘木等にそれが顕著です。虹梁（二本の柱を接なぐ水平材）の場合、渦巻と若葉の絵様が両端に彫られるのが一般的で、装飾が全体に及ぶことはほとんどありません。例えば長谷の五社宮本殿と拝殿（一八世紀中期、写真参照）がその例です。

ところが、小乙の諏訪神社本殿と拝殿（いずれも一八世紀中期）は少し趣きが異なります。本殿は一間社流造りの形式で正面の向拝には水引虹梁が架けられていますが、両端の絵様は渦巻と若葉というよりも「枝」と理解した方がよい意匠で、それぞれが虹梁の中央まで延びています。また、象鼻と蟇股も個性的かつ力強い印象を与えています。この意匠は本殿に限らず、拝殿の向拝まわりにも同じ様式が採られ、虹梁や手挟にそれがよく表現されています。七谷には洗練された意匠を持つ神社建築が点在していますが、諏訪神社の工匠はその流れを汲みつつ独自の感性を示しています。

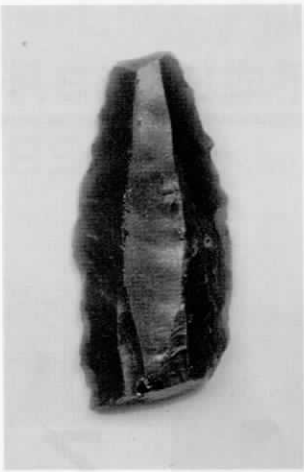
（文化財部会　山﨑完一）

遺物からみた 旧石器・縄文時代の移動と交流

山王原遺跡の黒曜石製石器

下高柳にある山王原遺跡は、今から約二万年前の旧石器時代にさかのぼる遺跡です。遺跡から発見された石器の一つに長さ五㎝ほどのナイフ形石器（写真1）があります。「ナイフ」といっても、槍のように突き刺す道具として狩りに使っていたようです。

この石器は黒曜石でつくられています。黒曜石は火山が噴火して堆積したガラス質の成分でできていて、割れ口が鋭いため旧石器時代から縄文時代にかけて、槍先や矢じりなどに使われてきました。黒曜石はどこにでも産出する岩石ではなく、産地は限られています。現在、黒曜石にX線を照射して微量元素を分析することによって、産地の特定が可能になっています。



▲ 写真1　山王原遺跡の黒曜石製ナイフ形石器

この分析の結果、山王原遺跡の黒曜石は長野県諏訪地方の和田峠産であることがわかりました。加茂とは直線距離で約二〇〇㎞になりますが、狩りでキャンプ地を移動しながら運ばれたものか、ムラからムラへの交流でもたらされたものか。広域に動く人々のありようが想像されます。

丸山遺跡の珪質頁岩と玉髄の石器

上大谷の丸山遺跡も旧石器時代の遺跡ですが、その石器には珪質頁岩や玉髄などが用いられています（写真2）。珪質頁岩は珪化が進んで光沢のある頁岩（堆積岩の一種）で、加茂川を含む信濃川流域では産出するものではなく、阿賀野川以北の地域あるいは山形県小国盆地の産地が考えられています。さらに玉髄は阿賀野川以北の遺跡に共通する白色の強いものです。加茂川流域の縄文時代の遺跡では、透明のものが多い五十嵐川流域の玉髄がよく使われているのですが、旧石器時代の丸山遺跡では、むしろ阿賀野川以北の地域との関係が強かったようです。阿賀野川以北から加茂川流域にやってきた人々が残していったのかもしれません。

▲ 写真2　丸山遺跡の石器　左2点が珪質頁岩製、右2点が玉髄製

縄文土器の様式の広がり

縄文土器は時期によって形や文様に地方色がみられます。信濃川流域では、中期（約五千年前）に火炎土器様式が発達しました。水源池遺跡（宮寄上）や陣ヶ峰遺跡などでは、火炎土器様式を特徴づける火焔型土器や王冠型土器（写真3）がみつかっています。これらは信濃川流域の他遺跡で発見されている土器と形や文様が共通しており、数十㎞離れた長岡や十日町の遺跡とまったく同じ流儀でつくられているのです。土器づくりはムラのなかでの仕事なので女性がその担い手であり、女性が結婚して周辺のムラへ移っていくことでその流儀が広がっていったとも考えられています。土器の形や文様には、信濃川流域のムラとムラとの同盟関係を示すシンボルのような意味があったのではないでしょうか。

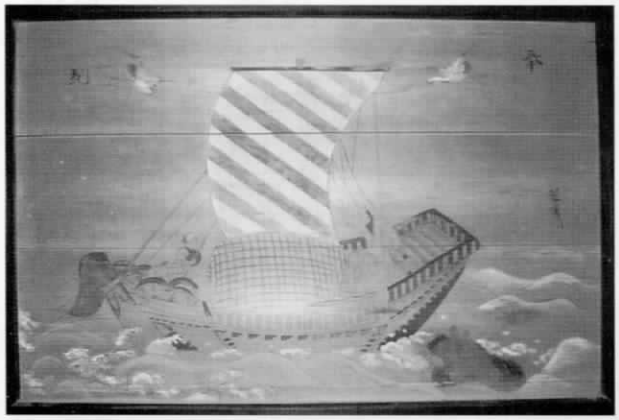
▶ 写真3　水源池遺跡（右）と長岡市・馬高遺跡の王冠型土器

（考古・古代・中世部会 小熊博史）

加茂の船絵馬

船絵馬は航海の安全を祈願して船主や船頭が社寺へ納めた奉納物です。市域では二枚が知られ、一枚は青海神社摂社の貴船神社に、もう一枚は天神林の天満宮に奉納されています。

貴船神社の船絵馬は、青・白二色の帆を広げて進む弁才船（弁財船）を描いています。船頭と水夫のほか、上空に一対の丹頂鶴を、海上には亀を描きます。船絵馬は順風満帆に進むものと嵐のなか航行するものとに大別できますが、本作は前者にあたっています。



▲ **船絵馬** 上段は青海神社摂社貴船神社、下段は天神林天満宮の所蔵

画面三か所に「奉納」「菊儀」「寿松印印」の墨書が残っています。菊儀が奉納者で、寿松が絵師とみられますが、いずれも経歴等はわかりません。また、年号は記されていませんが、筆遣いから幕末頃の制作と思われます。

天満宮の船絵馬は新潟町の画家・行田魁庵（一八一二～七四）の作品で、画面の右下に「魁庵印」の落款が残っています。魁庵は古町一番町の神明宮に勤めた神職で、絵を一ノ木戸村（三条市）神明宮の神職行田雲涛に学んでいます。

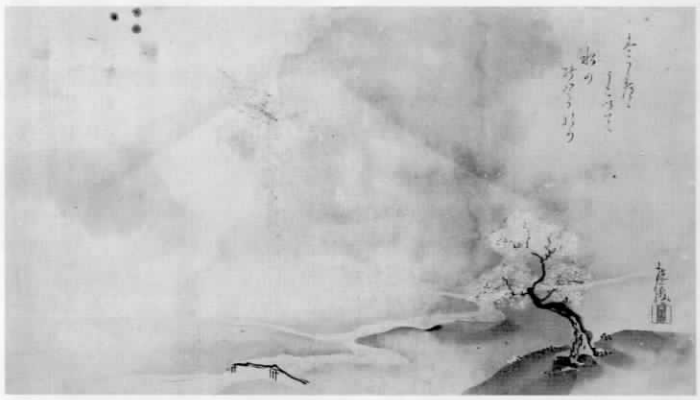
画面は風雨を大きく帆に受けつつ航行する弁才船を描いています。船尾には「天運丸」と船名があり、船員は、中空（画面左上）に浮かぶ金色の幣束に向かって拝み、航行の無事を祈っています。

左上に「慶応四戊辰年」とあり、一八六八年の奉納とわかります。また、画面には「船頭長吉」「佐渡国」と墨書が残っています。恐らく長吉は奉納者で、佐渡との交易に携わっていた人物とみられますが、経歴等は不明です。

（民俗部会　五十嵐　稔）

芦ノ出 日吉神社の俳画

俳画は俳句を添えて簡素な絵画を淡彩もしくは水墨で描いた作品です。芦ノ出・日吉神社の幣殿には、江戸の俳諧師守村抱儀（一八〇五～六二）の手になる俳画が掲げられています。抱儀は江戸の蔵前で旗本などの蔵米を取り扱った札差で、俳諧は京都の成田蒼虬に、絵と詩文はそれぞれ江戸の酒井抱一と中村仏庵に学びました。抱儀は各地を句作にめぐり、加茂町へは嘉永元年（一八四八）十一月から翌年五月まで滞在しました。本作はその間に描かれたものとみられます。



▲ **守村抱儀筆冨士に桜図**

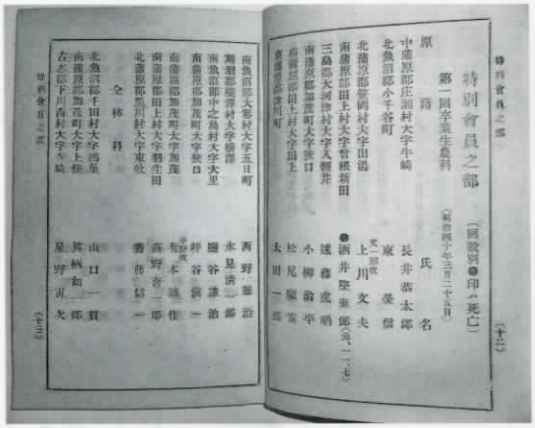
画面は小川を挟んで近景と遠景に二分され、遠景には冠雪した富士山を、近景には満開の桜を描き、余白に「すこしつゝ　うごいて水の　のとかなり」の発句を添えています。洗練された筆遣いが俳画ならではの趣きを醸しています。

本作の裏面に墨書があり、神社近くで宮守をしていた芦ノ出の番場與四郎が大正九年（一九二〇）に奉納したものとわかります。

（近世部会　関　正平）

草創期の加茂農林学校

刈羽郡組合立小国高等小学校を主席で卒業した青柳良吉は明治三十八年（一九〇五）、第三回生として県立農林学校（同三十九年四月、県立加茂農林学校と改称）に入学しました。寄宿舎生活を送る良吉は実家への手紙に午前四時から午後十時まで一日五回の給桑を行う養蚕実習や、「本校ノ実習ハ、最モ多忙中、毎日七時頃迄業務従事致シ居リ」と稲作実習が忙しく帰省は見合わせるなど学校生活や実習の様子を詳しく書き送っています。



◀ 大正三年の加茂農林学校校友会『会員名簿』（長岡市文書資料室所蔵青柳家文書）

良吉は四年間の厳しい学校生活を優秀な成績で修了しましたが、草創期の加茂農林学校は卒業すること自体大変難しかったのです。第一回生は七五名の入学者で卒業できたのはわずか二九名、卒業率は三八・七％でした。第九回生までの平均卒業率は五四・〇％でした。その理由として、病気や経済的理由以外に実習の厳しさがあったようです。座学の他に雪中の森林作業、炎天下田圃の耕作など昼夜長時間にわたる実習が必修とされましたが「心身虚弱の者に取りては耐へ難き労苦多かるべし…志操堅固ならざる者は到底成業の見込みな」（『県立農林学校要覧』明治三十八年）し、と学校側が入学志願者に対してあらかじめ決意と覚悟を促していたように、学業や実習の厳しさに耐えられず脱落した生徒が多かったようです。加茂農林学校に学び、無事修業年限を終えることはそれだけでも賞賛されるべきことだったのです。

（近現代部会　高橋雅弘）

表　加茂農林学校の入学者数・卒業者数・卒業率

入学年度	明治36	明治37	明治38	明治39	明治40	明治41	明治42	明治43	明治44	計
志願者数（名）	88	75	91	90	100	106	97	102	82	831
入学者数（名）	75	68	78	72	78	75	77	77	74	674
卒業者数（名）	29	36	46	31	33	44	38	51	56	364
卒業率（％）	38.7	52.9	59.0	43.1	42.3	58.7	49.4	66.2	75.7	54.0

加茂農林学校校友会『北越農林創立十周年記念号』（大正５年）より作成

上条の大橋

江戸時代、田上から加茂へ来るには陣ヶ峰を経て大橋を渡りました。加茂川には大橋のほかに橋がなかったからです。

大橋の来歴等はあまり知られていませんが、上条商人の史料（新潟市　関岳夫氏所蔵「年代記」）から考えてみます。

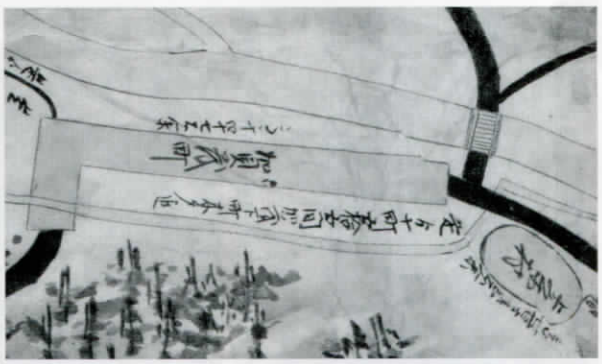
史料一　弘化二年（一八四五）「六月六日、大橋御下知下ル、先丑年（文政十二年＝一八二九年）流失ヨリ十七ケ年」

史料二　嘉永二年（一八四九）「六月二十一日洪水、大橋流失」

史料一より、橋は流されてすぐ掛け替えられたわけでなく、長年月を経てようやく領主（幕府）の許可が下りたこと、史料二からは架け替えから四年後の嘉永二年にまた流失したことが分かります。

こうしたたび重なる流失に、地域民は団結してあたりました。寛政五年（一七九三）の「加茂組明細帳」（本町　古川洸氏所蔵）に、領主が費用を負担する「（御）普請」として大橋のことが書かれています。普請が必要になると大橋が属した上条一村だけでなく、加茂町や狭口村を含む加茂組として幾度も領主へ願い出る必要があったのです。

（近世部会　桑原　孝）



▲ 元禄11年（1698）頃の「加茂組絵図」（新発田市立図書館所蔵）　大橋を示す最古の史料